

7

おきのえらぶじま
沖永良部島 (鹿児島県和泊町)

地域との信頼関係にもとづく 農園経営

花卉農家／イターン 遠藤 仁司



沖永良部島：鹿児島県の南546km、奄美群島の南部に位置し、和泊町と知名町の2町からなる。面積93.65km²、周囲55.85km、人口12,634人(平成29年4月現在)。温暖な気候を活かして、ジャガイモ、サトウキビなどの栽培やソリダゴなどの切花栽培が主産業となっている。

人情味あふれる沖永良部島

今でも忘れられない出来事があります。二〇一〇年五月、私たち夫婦が初めて沖永良部島を訪れた時の話です。

ホテルから屋敷母海岸を目指して歩いていたら私たちは、突然降り出した雨に困っていました。そこに一台の車が。聞くと、先ほど私たちとすれ違った車で、雨がどしゃ降りになってきたので心配になって引き返してきてくれた、とのことでした。ご好意にあまえて海岸まで送っていた



筆者の畑にて。当初から農業での独立を考えていた。

でしたが、驚きと同時に本当に嬉しい思い出となりました。沖永良部島は人情味があふれる島だな、ここで暮らしてみたいな、と心の底から感じた瞬間です。

農業での独立を目指して

私たち夫婦は、二人ともダイビングが好きで、沖縄県の離島などを訪れては「沖縄に限らず」島で暮らすのもいいかもしれない」と、話をしていました。沖永良部島は、前の職場の上司の出身地でもあり、たびたび島の話を耳にし、一度は行ってみたいと考えていた場所です。

島への移住を考えていたころ、ちょうど勤務先が早期希望退職者を募りました。二〇一〇年のことです。

これも何かの縁ではないかと、沖永良部島へ移住し、農業をはじめたいと本気で考え始めました。農業を志望したのは、島で独立できる仕事をしたからです。沖永良部島は農業の島なので、そのチャンスがあると思いました。

その三カ月後、本格的な移住に向け、再び沖永良部島を訪れました。東京から島へ移住された方のブログを通して知った花卉農園へ見学に行くと、まさに農業従事者を募集しているところのことでした。私はその場で「働きたい!」と伝え、二カ月後から雇ってもらえることになりました。今振り返ると、いろいろと良いタイミングが重なったと思います。

集落活動への積極的な参加

住居は、役場に相談しました。私は、島ならではの集落の人たちとの交流を求めて、中心部ではなく、人口が少ない地区で家を探したいと、町の空き家バンクに掲載されていた大家さんに連絡し、面談することになりました。面談の際には、島出身の農園の同僚が「島の人は、どこの誰だかわからない人には簡単に家を貸してくれないと思うから、私がついていってあげよう」と、一緒にきてくれました。役場職員の方の親身な協力もあり、「集落に積極的に参加すること」という条件のもと無事に家を借りることができ、二〇一二年に谷山地区に引っ越ししました。谷山地

区は、将来、私たち夫婦が独立して花卉農家となったとき、このあたりに畑を借りられたらいいな、と話し合っていた集落です。最初の家には三年ほど住みました。

移住後は、集落活動に積極的に参加しました。大家さんが何かにつけて地域の方に声を掛けてくれたこと、島には都会にはない苦労がいろいろあると覚悟の上で移住したこともあり、比較的スムーズに地域に入っていくことができたと思います。今では集落の伝統踊りを踊れるまでになり、地区の方々とは親戚同然の付き合いをさせていただいています。

花卉栽培と農園経営のスキルを学ぶ

農園で就業する際、その社長に「五年後には独立したい」と伝えました。社長からは「経理の勉強をなさい、



谷山地区の敬老会で集落の方と踊りを踊る。

数字に強くなれ」と、助言いただき、二〇一三年にさっそく簿記三級を取得しました。農園では、ソリダゴ栽培の技術的な指導はもちろん、独立に向けたさまざまなアドバイスをしていただきました。出荷データをみて先月より出荷量が少なければ、その原因を追究することなど、経営のノウハウまで教えてくれる農園で修行できたことは本当に幸運でした。社長には、今でも相談に乗ってもらっています。いきなり農業で独立することはとても厳しい。遠回りには感じますが、この農園で修行できたことが実は近道だったと実感しています。

農地を借りて独立へ

農園での仕事と並行して、二〇一三年の初め頃から、住居の大家さんと谷山地区に畑を持っている岸田源清さんに自分が描いているビジョンを伝え、「畑を貸してください」とのお願いを始めました。

「遠藤園芸設立プラン」と称して、基本目標、独立に必要なこと、谷山地区で花卉栽培をする利点、三カ年計画と年ごとに取り組む項目、畑を借りることができた場合の願いごとなどを具体的に書いた紙を提出。ここまで真剣に考えてやっていますという思いを継続的に伝えていきました。その結果、二〇一五年一月に農地を貸していただけたことになりました。農業をやりたいくても畑を借りられず、困

っている人がたくさんいるという話を聞いていたので、私は本当に幸運だったと思います。

同年八月、国の青年等就農計画制度（新規就農者の所得確保支援や資金の無利子貸付などを行う。市町村が認定）を受け、五年間にわたり花卉農家としての技術や仕事のノウハウを学んだ農園から独立し、就農準備を始めました。さらに一〇月には、県の農業普及課の新規就農者向け融資を受け、平張りハウスなどを設備しました。機械や倉庫などの施設

を準備しながらの栽培では、花づくりが疎かになると考え、

最初の一年間はソリダゴを栽培せず準備に専念。結局、本格的に出荷できたのは二〇一六年九月下旬です。この年は、九月で二五万本ほど出荷しました。主な出荷先は、東北、関東、関西方面の六市場です。

昨年は、幸いにも



農園のノウハウをすべて投入して自主製作した平張り施設。

大きな台風もなく順調に出荷できましたが、まだ始まったばかりです。苦勞というより、やらなければならないことが山積していると感じています。

生産性の高い農園経営を目指して



ソリダゴをサイズ別に選別する。

ひとまず三年間は今の規模で頑張り、徐々に規模を拡大できればと考えています。倉庫は将来のことを想定し広めにつくってあります。移住前に働いていた職場でトヨタの「カイゼン（改善）」活動の経験があり、効率化の重要性は身を持って知っています。この三年間で生産性が高く、身体的に無理がない農園経営の解を見出したと思っています。もう一つ意識していることは、現在取り引きしている花卉市場になるべく顔を出すことです。直接顔を合わせて、農園の状況をお伝えし、活発な情報交換を行

島からのメッセージ ①

●壮年団長も務め、地区に溶け込んだ遠藤さん

遠藤さん夫妻は、清掃活動、敬老会や農業祭での踊り、町民体育大会など集落の活動に積極的に参加してくれています。住民が少ない集落なので、みんなが集落活動に参加せざるを得ない状況ですが、嫌な顔ひとつしないので、むしろポジティブに活動を楽しんでいるように感じる遠藤さん夫妻は、とてもありがたい存在です。彼らの存在が集落の皆さんにも影響を与えてくれており、自分たちも楽しんで集落活動をしていこうという機運が少しずつ広がってきていると感じています。

集落に馴染もうという遠藤さんの思いは、集落の皆さんにもしっかり伝わっており、仁司さんには2014年に谷山地区の組長さん、翌15年に壮年団長を務めていただくまでになりました。また、奥さんには今年度から婦人会長を務めてもらっています。

この地に来てわずか5年ですが、すっかり地元民です。

（谷山地区区長 島田米明）

うことで、しっかりと信頼関係を築いていきたいと考えています。取引先には独立前からの顔見知りもあり、先日は「今回の花は、ポリウムが足りなくなかない？」と、指摘されました。ハッキリ言ってもらえることに感謝するとともに、緊張感を持って取り組んでいかなければと、気を引き締めました。

島からのメッセージ ②

◎先祖伝来の農地を貸すにふさわしい信頼感

私は20年くらい前に、定年退職を機に島に帰ってきて、先祖代々の土地でジャガイモやサトウキビなどの農作物をつくっていました。町の空き家バンクに登録していた家を貸してほしいと、遠藤さんが島出身の同僚と一緒に訪ねてきたのは、2011年頃だったと思います。私は、家屋の修繕や屋敷内の草取りは自分たちで行う、集落活動に積極的に参加することを条件に家を貸すことにしました。遠藤さんには、2012～15年まで入居してもらいました。

彼からは、いずれ独立したいので畑を貸してほしいとの相談も受けていました。当初は、よくわからない人に先祖代々の土地を貸すことはできないと断っていました。農具・機械・設備もないのに果たして花卉栽培ができるのか、という心配もありました。しかし、どんな農園にしたいのか、自分の土地で花卉栽培をすることの利点などが書かれた農園の設立プランを持ってきたり、そのために必要なこと、やるべきこと、畑を借りる上でのお願いごとなどが書かれた行動計画を説明する遠藤さんの真摯な姿勢に、少しずつ心が動かされました。

何よりも、家を貸す際の約束を守り、日頃から集落活動に積極的に参加し、活躍している彼をみて、この人は信頼できると思い畑を貸す決意を固めました。

(遠藤さんの畑の地主 岸田源清)

遠藤仁司 (えんどう ひとし)

1972年山形市生まれ。国際航空専門学校卒業後、東亜エアサービス株式会社(現株式会社JALグランドサービス)に入社。2010年、早期退職制度を利用し沖永良部島へ移住。農園での就業を経て2015年に独立。

※和泊町の移住情報は、「くらすわどまり」
(<http://www.kurasu-wadomari.info/>)へ。

気持ちにゆとりのある島の生活

私は横浜から沖永良部島にイターンしましたが、移住前と比べると収入は少なくなりました。また島の物価が比較的高く苦勞することもありますが、支出も少なくなったので生活レベルは変わっていないように感じます。むしろ都会での生活と比べると時間や気持ちにゆとりが持っています。私には息子がおりますが、生徒数の少ない島の教育環境で小学・中学・高校と育っていくことで、都会の厳しさに

耐えられる精神力が身につくのか心配なところもあります。しかし、地区の方々に見守られ、同年齢だけでなく、お兄ちゃんやお姉ちゃんと一緒になって成長していく島の教育にとっても魅力を感じています。やっとの思いで実現できた島での農業。これからも良い花をつくれるよう、そして島の振興に貢献できるよう頑張っていきたいと思っています。



家族と過ごす時間も増えた。